

図書室の広報活動

事例Ⅱ 館報・速報の発行について

安達 貴美子（西淀病院図書室）

1. 病院図書室における広報の意義

病院図書室は設置数も独立したものは少なく、業務のスタンダード化も遅れ、その位置づけも未確立なところが多い。又、外部の人からは病院図書室＝患者図書室だと混同されることも少なくない。病院内でも、医師のみが利用できると思っている人や、司書は本の整理や貸出のみが仕事だと思う人も数多く、院内外を問わず病院図書室に対する認識はまだ薄い。

「企業広報学入門」¹⁾という本に、『広報とは、社会に向けて企業なり組織なりが自らの存在意義を主張し、存在の価値を立証して、その存在と発展を容認してもらう作業だ』と定義している。営利を目的とする企業とは性格は異なるが、信頼を得るための活動としての広報の基本は同じである。広報することによって潜在的利用者を利用へと導き、利用者にはさらに効果的に利用してもらう。一方、図書室では利用者の要求に対応していくなかでその活動を拡大し利用者や利用対象者の信頼を得るよう努力する。というように相互の働きかけによって図書室活動をさらに充実・発展させていくことに意義があると思う。

2. 病院図書室における広報の種類（方法）

広報の方法は大きくは利用者と図書室員が

直接コミュニケーションする方法と、何らかの媒体を通して伝達する間接的な方法とに分けられるが、以下に当院で行っているものを中心に紹介する（表1）。

表1 広報活動の種類

A. 直接的方法

- 1) オリエンテーション
- 2) 文献利用指導

B. 間接的方法

- 1) 印刷物（図書室ニュース、新着案内、利用の手引、コンテンツ・サービス etc.）
- 2) 掲示（利用案内、図書室ニュース、書評、お知らせ）
- 3) 展示（新着資料、見計本）
- 4) その他（院内報、責任者会議、医書展、年報）

〔直接的方法〕

オリエンテーション、文献利用指導は、奥出さんが紹介されたので省く。この他、病院は狭い社会であり個人的に直接伝達することも効果がある。又、院内での研究集会などで発表するのも一手段である。

〔間接的方法〕

図書館報や新着案内、コンテンツ・サービス利用の手引など印刷物を媒体とするものがある。各々配布先や発行部数も異なるが、広い範囲に伝達され、読む人もその気になれば

ゆっくり読めるので伝達力がある。

掲示板や図書室内にカラーマジックインクを使った手作りの“お知らせ”を掲示するのも短時間で作成でき便利である。又、目録カードの見方や貸出方法、各種サービスの利用案内を目につく場所に貼っておくのも親切である。この他、書評など新聞切り抜きや出版社の新刊案内ポスターやリーフレットをそのまま掲示して利用している(図1)。

新着資料を展示する図書室は多いが、当院では新刊の見計本なども展示することがある(図2)。書店の協力を得て医書展を開くのも利用者に喜ばれる。展示は現物を手にとって実際に見るので資料の内容に関しては最も正確な伝達法である。

その他院内では読者率の高い院内報を利用するのも効果がある。当院では院内報が現在日刊で発行されており、速報の必要があるもの広範囲に知らせる必要があるものなど、た

びたびその紙面を利用している。通達事項や協力を依頼する場合は責任者会議など管理ルートに連絡するのも一方法である。又、病院においては不採算部門ということで経営などの影響を受けやすい図書室では管理者の信頼を得ることも図書室活動を行う上で大切なポイントとなる。管理者に対しては年報などで活動を報告し、その必要性と発展を認めてもらうためのアプローチも大切なことである。年報に限らず研究会や研修会参加のたびに報告書を通して最近の動向や図書室活動に理解と関心を求める努力も必要だと思う。

以上、広報には種々の方法があるが、担当者が一人、あるいは他職務との兼任というケースが多い職場では広報活動までに手が回らないのが実情のようだ。「図書室の実態調査」²⁾によると約半数の図書室で何らかの広報を行っているがその結果については『効果がない』『労力の割に効果がない』という回答が多く、

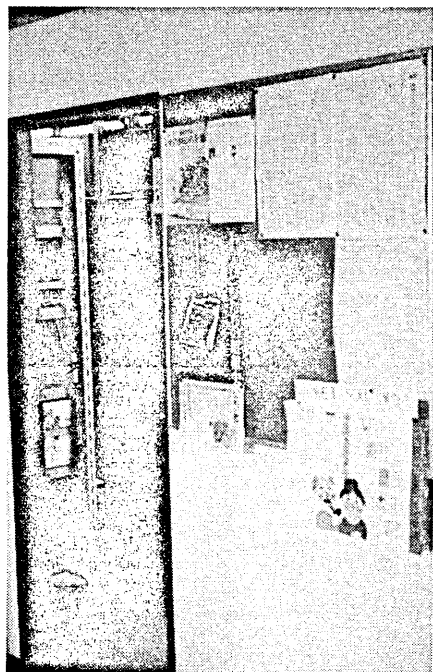


図1 図書室入口の掲示板

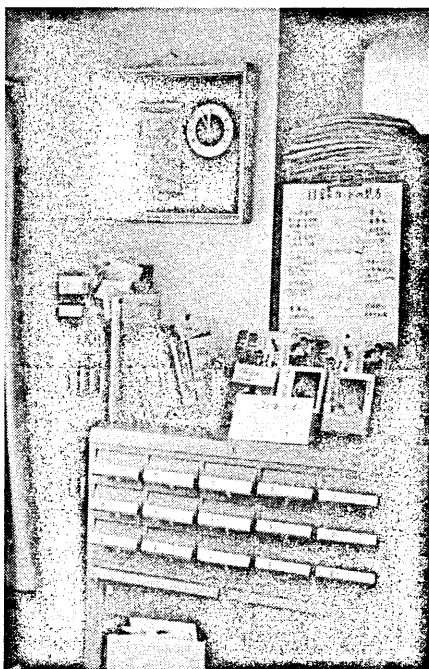


図2 新刊見計本の展示と目録カードの見方の案内

これが広報活動を積極的に行ないづらい原因の一つとも考えられる。しかし、Case by caseで色々な媒体を単独あるいは複数で用いればかなり効果的に伝達できると思う。

3. 当院における広報の実際（ニュースの発行）

当室ではその効果は別にして各種広報を試みているが、今回は図書室ニュースの作成の実際を紹介する。

1) 発行の目的と経過

当院では病院開設と同時に病歴管理室、図書室が併設され2名が配属されたが、専門職種としては我国では比較的新しく、他の職種と比べると業務内容が不明確なため、各々の業務とは接点のない職種に思われていたようである。そこでまずは両室の存在と、何をするとところかということを示意表示する意味で「病歴図書室だより」というニュースを発行することにした。創刊号（図3）は両室の業務内容を紹介しただけの簡単なものである。その後新着資料案内や図書委員会報告を主な内容に、1～2ヶ月に1回の不定期発行を続

けた。

ニュースにもマンネリ化を感じ出した頃、近畿病図協へ入会する機会を得た。以前は他病院図書室とはコンタクトがなく、図書館学の知識もないまま出来る範囲で気ままな図書室活動を行っていたが、入会后研修会に参加するなど病院図書室に必要な資料と活動の知識が増えていくと同時に、それらを当院の利用者にも知らせる必要を感じた。広報には種々の媒体があるが、社会からみれば図書館や図書館員それ自体が一つの媒体であり、新しい情報やサービス等知り得たことは全て利用者に知らせる役割があると思う。入会後は広報することが急増し、今までのB4版1枚では紙面も足りず、これを機にニュースの形式を変更し、発行も月刊と決め現在に至っている。現在のものは今はやりのミニコミや労組機関紙風の手書きのニュース（図4）にしている。表裏二面のもので各職場一部づつコピーを配布している。

2) 制作実務

専用の版下用紙を使用し、記事は製図用のロットリングペン、見出しはマジックやサイ

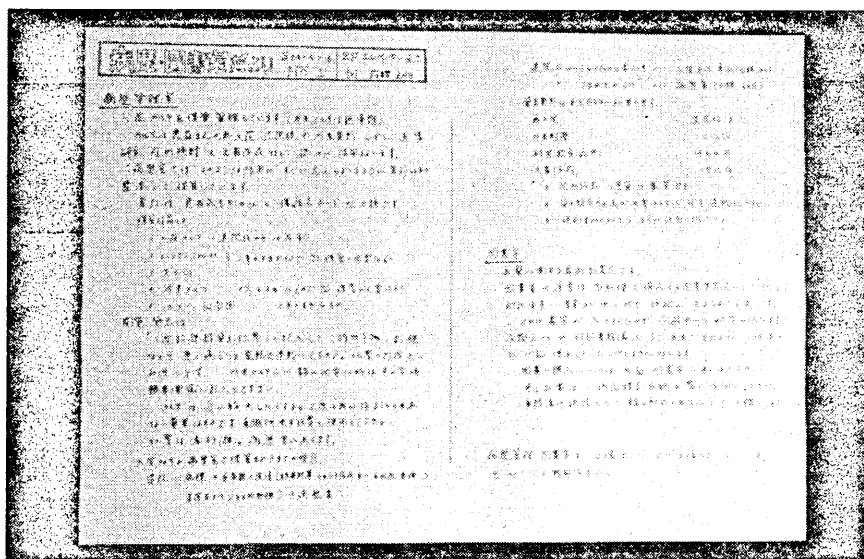


図3 「病歴図書室だより」創刊号

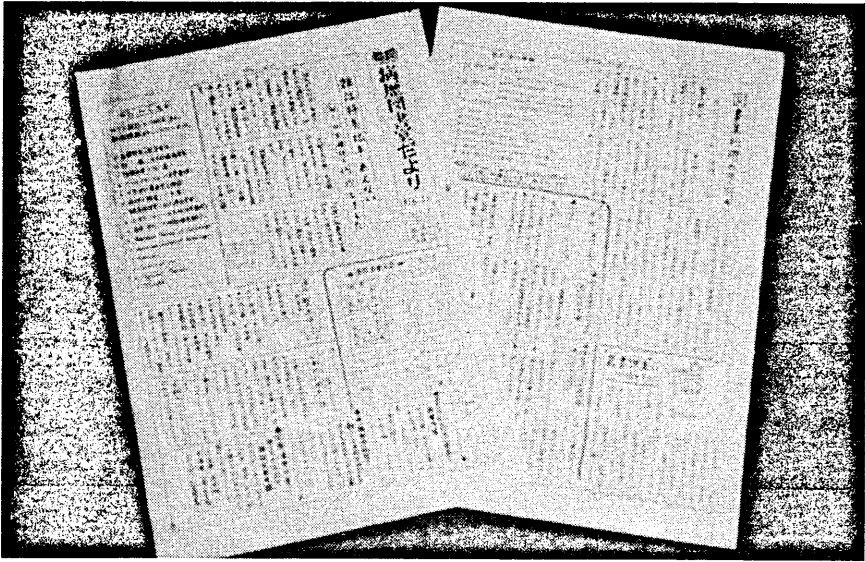


図4 現在の「病歴図書室だより」

ンペンを使って書いている。苦勞するのがレイアウトで、ふだん何気なく見ている新聞や雑誌もかなり工夫されているので参考になる。これには「編集レイアウト入門」³⁾他初心者向けの本も多数出版されているので参考にはしているが、専門的に凝らず、見出し文字を工夫したり、カットを入れるだけでもかなり雰囲気が変わり読みやすいものとなる。内容は当初からの方針どおり全職員を対象としたもので、誰でも気軽に読めるようなものを心がけている。

資料に関しては、新着図書リストや雑誌特集記事の紹介（付録として添付している）、職員に原稿依頼した本の紹介文・感想文を掲載している。紙面への職員の参加は筆者やその職場の仲間はじめ読者層を拡げる効果がある。

利用に関する記事は各種サービスの紹介や文献の探し方等「利用のてびき」を掲載している。

これらの他研究会の参加報告や展示会、行事案内、図書委員会報告が主な内容である。

編集・制作は計画的に行なわれるのが望ま

しいが、図書室業務を一人で担当していると片手間に少しずつ紙面を埋めていくため日数がかかる。記事が集まれば2～3日で完成することもあるが、たいていは2週間前後が制作日数である。正確ではないが一号分の清書に半日はかかると思う。月刊とはいえ1ヶ月にかろうじて1回発行の状態である。

3) 広報の効果（アンケート調査を実施して）

以上の様にして出来あがっても気になるのはその効果である。「図書室の実態調査」²⁾にも「労力の割に効果がない」という回答がかなり多いが、当院でも当初1～2年は利用者の反応はあまり感じられなかった様に思う。ニュースの形式変更後から、ニュースを読んで利用したとみられる利用者がポツポツ来室し始めた。ニュース記事に対する問い合わせも増えてきた。これら担当者が直接受ける利用者の反応は限られたものだが、潜在的な利用者の反応やニュースの効果を検査する目的でアンケートを実施した。対象者全職員約280名に対し回収が39名、回収率が14.5%と低く残念であったが一つの結果としてまとめてみた。

図5はどの程度読まれているかをみたものである。「毎号読む人」が一番多く、ついで「気がついたとき」となる。「発行を知らない」人はいない。ニュースは各科に一部ずつ配布しているが、その後各職場でどのように利用されているかは不明である。回覧がしにくい交替勤務の看護婦や技術系職員に「気がついた時読む」人が多い。

図6はニュースが役に立っているかどうかの間である。「役に立つ」「少しは役立つ」が大部分を占め、何らかの役に立っているようである。「役立たない」と回答した4名は前問の「ほとんど読まない」と同一人である。

どんな点で役立つかを聞いたのが図7である。「情報が得られる」と答えた人が一番多く「仕事の内容がわかる」「利用法がわかる」と続くが「積極的に利用するようになった」人は少ない。これは役に立ててはいるが必ずしも直接利用にはつながらない、しかし必要があればいつでも利用者となることを示していると思う。

どんな記事が役立っているかが図8である。

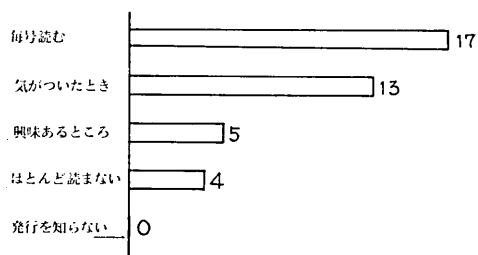


図5 どの程度読まれているか

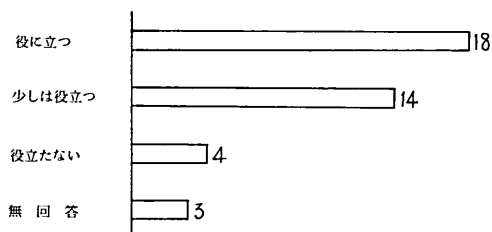


図6 どの程度役立っているか

「本の紹介文・感想文」が一番多い。これを見ると資料に関するものが記事も多いが、役に立っていることがわかる。図書室としては各種サービスや効果的な利用法についてをかなり力を入れて書いているつもりがあまり役立ってはいないことがわかり、改善の必要を感じている。

図9はニュースに対する不満点についての回答である。「発行回数・部数が少ない」が8名で多い。実情では月1回発行が精一杯であり、これは配布方法や発行部数である程度改善できると思う。

最後に参考までにどの程度図書室を利用しているかを問うた(図10)。ほとんどの人が利用する人であったが常連の利用者は3割以下であった。

以上アンケート結果によると、回収率は悪いが最低これだけの人は気がつけばニュースに目を通し、資料情報を中心に何らかの情報を

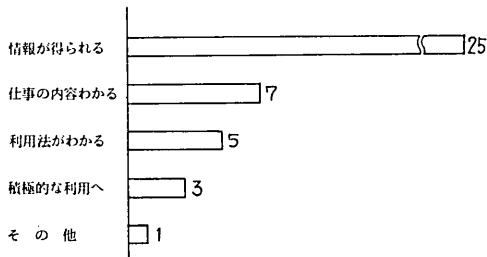


図7 どんな点で役立つか

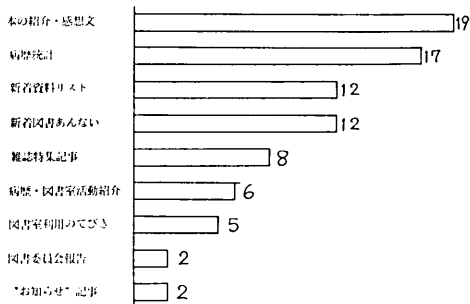


図8 どんな記事が役立つか

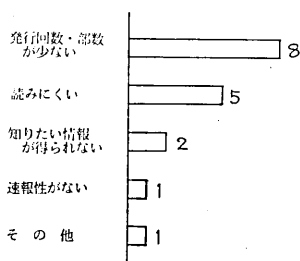


図9 ニュースに対する不満

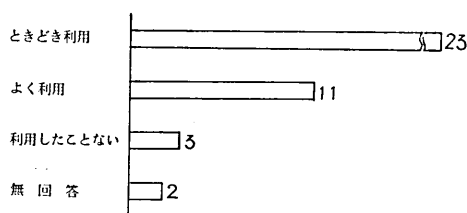


図10 図書室の利用度

得るということでも役立てていることがわかった。又、アンケートを実施したことで未回答者も含めてニュースの存在を知らず一つの広報にもなったと思う。回収率に関してはニュースの配布法とも関連するが、全くアンケート用紙を見たこともない人も少なからずあり、内容も含めてアンケート調査の準備不足を反省している。

ま と め

アンケート結果も含めて当院でのニュース発行を振り返って感じたことは、ニュースを目にして何かを得た人は、まず読者として定着しているということである。図書室の常連の利用者に限らず、発行直後にニュース片手に図書室を訪れる利用者が、それも毎回新しい顔ぶれが増えてくるとそれが励みとなり、

定期的に発行を続ける必要をあらためて感じる。内容に関しては、利用者の関心や欲求は何かということを日常の図書室活動を通して知っておく必要があり、それが読んで何らかの役に立つという記事に結びつくということ、そして同じ作るなら読みやすい内容と、見出し文句、レイアウト、カットなどで読者の目を引きつける必要があること。ただし見かけばかりにこだわらずとも狭い分野での広報紙としてまずは発行することに意義があること。ニュースは効果的に配布することなどである。又、現在まで49号を発行しているが、今回の発表を機会に1号から読み直してみたが、資料の増加や図書室サービスの拡充など、そのまま記録としての図書室の歩みにもなっていた。試行錯誤を繰り返しながらも発行を続けてきたことは発展途上段階にある図書室と利用者・管理者のコミュニケーション、そして図書室活動の充実発展に一定程度の役割を果たしてきたものと思う。

<参 考 文 献>

- 1) 村上好重：企業広報学入門 紀尾井書房 1982.p.18
- 2) 全図研事前アンケート調査結果
- 3) 小森孝児編：編集レイアウト入門 日本機関紙出版センター1978
- 4) 重富久代：広報活動 医学資料の整理と利用 トシマ参考図書 1983：p 294-295
- 5) 小宅哲哉：医学図書館におけるコミュニケーションと広報活動 医学図書館29(2)：p.171-177,1982
- 6) 中村光雄：広報活動-PR. 図書館ハンドブック第4版 p.364-p.369